

在大韓民国日本語学習者の漢字学習ストラテジー

東京外国語大学大学院博士前期課程 高橋 亘

東京外国語大学准教授 海野多枝

キーワード：漢字学習ストラテジー、漢字に対する意識、韓国語母語話者

本稿は、韓国で実施した質問紙調査の結果を通し、韓国で学ぶ日本語学習者の漢字学習への意識とストラテジーの傾向を明らかにする。漢字学習ストラテジーとは、漢字をより楽しく効果的に学ぶために学習者が用いる手段を指す (Oxford 1990; キム 2005)。従来、漢字学習に関する調査は非漢字圏学習者を対象としたものが多く (大北 1995; 加納 1998; キム 2005)、韓国で学ぶ学習者に重点を置くものは少ない (海野他 2004)。また、「漢字文化圏」(淡島 1992)と言われながら、戦後幾度にわたる漢字教育政策変更を繰り返す中で韓国における漢字への認知度や意識が低下したとの指摘もある (文 2007)。こうした中、学習目的や学習者特性ごとに漢字学習の意識やストラテジーを正確に把握し、漢字学習への意欲の向上や効率化につなげていく努力が望まれる。

本研究では、学院と大学という異なる環境で学ぶ学習者計 171 名に 65 項目からなる質問紙調査を実施し、全体的傾向を探るとともに、両グループの違いについても統計的に分析した。主な結果として、半数以上の回答者が「漢字が好きではない」と回答、大部分の学習者が「漢字の読み方」、「書き方」共に「難しい」と回答し、漢字に対する苦手意識が明らかとなった。また、「繰り返し書く」ストラテジーの多用など、先行研究と類似した傾向も見られた反面、日本のテレビや漫画などのリソースを利用するという韓国特有の傾向も見られた。さらに、学院生は「計画に沿って学習する」などのメタ認知ストラテジーや、「教師に質問する」などの社会的ストラテジーを有意に多用する傾向があるのに対し、大学生は各種記憶ストラテジーやリソース利用を有意に多用する傾向が見られ、学習目的や環境に応じてストラテジー使用傾向が異なることが示唆された。これらの結果をふまえて日本語教育への示唆について論じるとともに、今後の課題にも触れる。

(799字)

参考文献

- 淡島成高 (1992) 「韓国出身留学生の漢字表記」『麗澤大学紀要』55 麗澤大学 pp.51-67
海野多枝、菊池富美子、野村愛 (2004) 「第二言語学習ストラテジー研究に向けての基礎調査」『言語情報学研究報告 5 第二言語の教育・評価・習得』(吉富朝子、根岸雅史、海野多枝編) 東京外国語大学大学院 21 世紀 COE 言語運用を基盤とする言語情報学拠点 pp. 231-283
大北葉子 (1995) 「漢字学習ストラテジーと学生の漢字学習に対する信念」『世界の日

本語教育』5 国際交流基金日本語国際センター pp.105-124

加納千恵子 (1998) 「非漢字圏学習者の漢字力と習得過程」『日本語教育論文集 - 小出詞子先生退職記念 - 』凡人社 pp.257-268

タンテュエンテイキム (2005) 「非漢字圏日本語学習者の漢字学習ストラテジーに関する実証的研究 - ベトナム学習者を対象として」 東京外国語大学修士論文

文嬉眞 (2007) 「韓国における文字政策—漢字教育の変遷について—」『愛知学院大学語研紀要』32(1) 愛知学院大学語学研究所 pp.173-201

Oxford, R. L. (1990) *Language learning strategies: what every teacher should know*. New York: Newbury House/ Harper & Row.